【原著】

第１子に小学生がいる保護者の家庭で性教育を行う際の支援に関する検証

― 父母間での性教育に関する意識の違いについて ―

亀 石 知 美[＊1]，下 見 千 恵[＊2]

【要 旨】

第１子が小学生である保護者を対象に，家庭での性教育の実態・戸惑いの内容，専門職に求める支援について調査した。その結果，84.6％の保護者は家庭での性教育を必要だと考えているが，実施は32.1％であった。父親による性教育の実施は14.9％であり，母親は父親の性教育実施を期待していることが推察された。性教育の開始が望ましいと考える年齢は，第二次性徴出現時期と関連し，性行為に関する内容に戸惑いや困難さを感じていた。求める支援の内容には，性教育の内容・項目・表現方法を教えて欲しいと答えており，母親は相談にのって欲しいと考えていた。これらのことから，性教育のマニュアル作成，保護者への性教育等の支援が必要であることがわかった。

【キーワード】性教育，小学生，保護者

Ⅰ．序 論

近年，インターネットの普及などにより，子ども達は幼少期から性に関する様々な情報に無防備にさらされており，子ども達が性に関する正しい知識をもつ必要性が高まっていると言える。小学低学年は，論理的思考ができるようになり，科学的なものの考え方の萌芽の時期であると言われている（中島，2009）。一方でマスメディアの影響を受けやすく，大人の偏った性情報も無批判に受け入れてしまう問題もある。加えて，小学生の６年間は第二次性徴が出現する思春期を含んでおり，身体的発達と精神的発達の不均衡，自立性の発達に伴う著しい変化が生じる時期には個人差がある。

小学生の保護者は，氾濫する性情報への対応を迫られ戸惑いを感じていることがわかっている（竹俣，木村，2010）。そして，性情報氾濫による悪影響と今後の成長発達に伴う問題出現に不安を感じ，学校との綿密な連携と専門職からのアドバイスを求めていることが明らかになっている（小倉，北川，2010）。しかし，氾濫する性情報に対応するための情報が少なく保護者の準備が整っていないことが，性教育を行う上で自身の戸惑い等の一因ではないかと推測できる。

以上のような性教育の状況で，小学生の保護者に関する研究は少なく，子どもの性教育にどのような支援を求めているのか，具体的な内容については十分に明らかになっていない。そこで，第１子に小学生の子どもをもつ保護者に対してアンケート調査を行い，家庭で性教育を行う際に感じる戸惑いや困難さの内容を明らかにし，専門職にどのような支援を求めているのかを明らかにするために調査を実施した。また，母親は男児に対する性教育に困難さを感じていることがわかっており（三浦，島田，2010），父親の性教育実施への積極的な参加の必要性が推察される。そして，小学生の父親の家庭での性教育の実態は明らかになっていない。そこで，父母による家庭での性教育への意識の違いについて検討することを本研究の目的とする。

Ⅱ．研究方法

１．調査対象

Ａ県内２校の小学生の保護者668名を対象とした。

２．調査内容

小学生をもつ保護者10名（父親４名，母親６名）を対象に，戸惑いの内容と専門職に求める具体的な支援の内容を把握するために，面接を行った。この

＊1 日本赤十字広島看護大学 母性看護学･助産学

＊2 広島国際大学 看護学部看護学科

面接で明らかになった情報の意味内容を共同研究者とともに吟味し，家庭での性教育に関する戸惑いの内容・項目，専門職に求める支援の内容・項目をあげ，自記式質問紙を作成した。この質問項目は，文部科学省の「新学習指導要領」「学校における性教育の考え方，進め方」を参考に作成した。質問内容は，①家庭での性教育の実態，②家庭で行う性教育の内容，③家庭で性教育を行う際の戸惑いや困難さの内容，④家庭で性教育を行う際に求める支援に分類された。

平成25年９月，新学期開始日に各小学校から生徒を通じて各家庭,保護者へアンケート用紙を配布し，郵送にて回収した。

なお，本研究では，性教育を「性・生殖を中心に心身の機能の発達に関する理解を深め，成長発達に伴う不安や悩みに対応できる力を育み，自分や他者の価値を尊重し相手を思いやる心を醸成することについて教育すること」と定義する。また，専門職とは，医師・看護師・保健師・助産師・小学校の教職員と本研究では定義した。

３．倫理的配慮

質問紙は無記名であること，統計処理を施し個人が特定されないこと，研究以外の目的に使用されないことなどを小学校校長に面談の上説明し了解を得た。加えて，保護者に対しては同様の内容を書面で説明し，同意を得た。なお，本研究は，県立広島大学の倫理委員会にて審査を受け承認（承認番号第12MH040号）を得ている。

４．データ分析方法

分析方法は，SPSS statistics にてχ^2検定による分析を行い有意水準を５％未満とした。

Ⅲ．結果

１．対象の属性（表１）

小学生の保護者668名中，回答者189名（回収率28.3％）の内，本研究の対象者である第１子が小学生の保護者は131名であった。父母の平均年齢は39.45歳（SD＝4.63），年代別では39歳以下が71名，40歳以上59名であった。第１子の性別は男児61名（47.3％），女児68名（52.7％）であった。第１子の学年別では,低学年（１，２年生）48名,中学年（３，４年生）41名，高学年（５，６年生）31名であった。

２．家庭での性教育実施について

家庭での性教育が必要だと考える保護者は，110名（84.6％）であった。父母別では，父親が31名，母親は79名であった。性教育を実施したことがある保護者は，42名（32.1％）であり，父母別では父親が６名，母親が36名であった。父親が性教育を必要と考える率は72.1％であり，実施率は14.9％であった。母親が性教育を必要だと考える率は89.8％であり，実施率は40.9％であった。そして，性教育が必要だと考える子どもの年齢（最頻値）は，男児で12歳，女児では10歳であった。

望ましいと考える性教育の実施者は，「父母両方」が53名と最も多く，次いで「子どもと同性の親」の49名が多かった。父母別では，父親は「父母両方」が最も多く，母親は「子どもと同性の親」が最も多かった。望ましいと考える理由では，「同性同士が話しやすいから」が最も多く，次いで「父母（両方の性）で教育することにより，自分の性について伝えやすく，子どもも両方の性を理解しやすいから」が多かった。父母別では，父親は「異性のことはわからないから」「父母（両方の性）で教育することにより，自分の性について伝えやすく，子どもも両方の性を理解しやすいから」が多かった。母親では，「同性同士が話しやすいから」が最も多かった。

３．家庭で行う性教育の項目

家庭で性教育を行う必要があると考える性教育の項目では，「思春期の身体的発達」が最も多く，実施した項目では，「身体や性器の清潔保持の習慣」が最も多かった。父母別については，図１に示す通りであり，母親は，必要だと考える項目と実施した項目に違いがあった。

４．家庭での性教育に感じる戸惑いや困難さ

家庭での性教育に戸惑いや困難さを感じる保護者は，85名（64.9％）であり，父親は21名（48.8％），母親は64名（72.7％）であった。戸惑いや困難さを感じる理由では，「どう伝えたら良いかわからないから」が父母ともに最も多く，戸惑いや困難さを感じる項目は「性行為（セックス）について」が最も多かった。

５．専門職に求める支援

専門職に支援を求める者の割合は，76.3％で，父親は29名（67.4％），母親は71名（80.7％）であった。そして，専門職に求める支援の内容は，「子どもに性教育を行うときに適切な表現方法・言葉を教えてほしい」が父母ともに最も多く，母親のみが「家庭で性教育を行う保護者の相談にのってほしい」を選んでいた（図２）。また,支援を求める専門職では「助産師」「保健師」が多く，父親は「保健師」，母親は「助産師」を最も多く選んでいた。

保護者の性別と「家庭での性教育が必要」（χ^2＝5.655, df＝１，p＜.05）と「家庭で性教育を実施したことがある」（χ^2＝11.033, df＝１, p＜.01）「家

庭での性教育に戸惑いや困難さを感じる」($\chi^2 = 7.236$, df = 1, $p < .01$)「専門職の支援を求める」($\chi^2 = 3.857$, df = 1，$p < .05$）において，表２に示すように有意差を認めた。親の年代別では，「家庭での性教育が必要」「家庭で性教育を実施したことがある」「家庭での性教育に戸惑いや困難さを感じる」「専門職に支援を求める」において有意差を認めることはなった。また，第１子の性別，低・中・高学年別での比較では，「家庭での性教育に戸惑いや困難さを感じる」（$\chi^2 = 6.276$，df = 2，$p < .05$）において有意差を認め（表３），調整済み残差から低学年で有意に戸惑いや困難さを感じる保護者が多く，中学年では有意に少なかった。

表１　調査対象者の基本属性

n=131

項目		n	%
記入者性別	男性	43	32.8
	女性	88	67.2
記入者年代	20歳代	1	0.8
	30歳代	70	53.8
	40歳代	57	43.8
	50歳代	1	0.8
	60歳代	1	0.8
記入者学歴	中学校	16	12.5
	高等学校	27	21.1
	専門学校	22	17.2
	短期大学	20	15.6
	大学	38	29.7
	大学院	4	3.1
	その他	1	0.8
記入者職業	会社員	55	42.6
	自営業	18	14
	公務員（教員以外）	6	4.7
	教員	4	3.1
	医師	0	0
	看護師	6	4.7
	助産師	1	0.8
	保健師	0	0
	無職	21	16.3
	その他	18	14
子どもの性別	男児	61	47.3
	女児	68	52.7
子どもの年齢	6歳	11	8.7
	7歳	27	21.3
	8歳	28	22
	9歳	14	11
	10歳	20	15.7
	11歳	15	11.8
	12歳	12	9.4

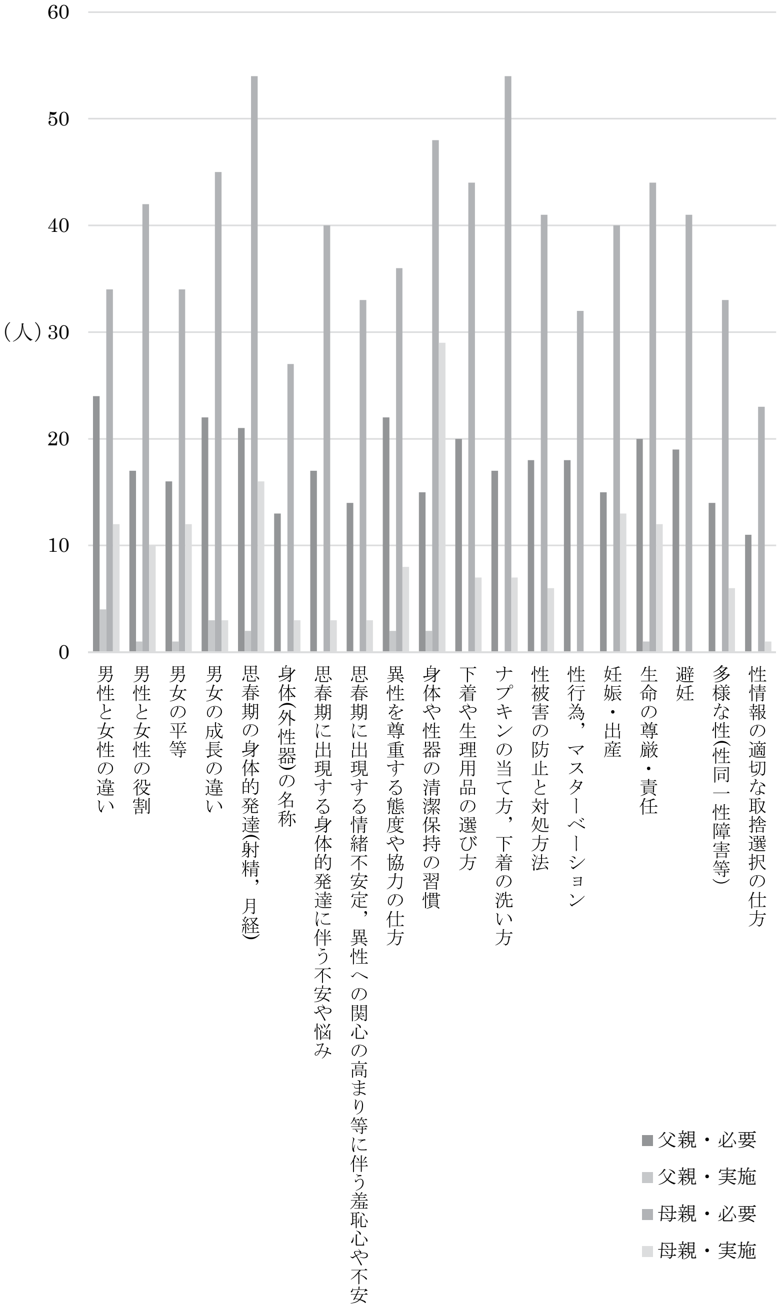

図１　家庭で必要だと考える・実施したことがある性教育の内容（複数回答）

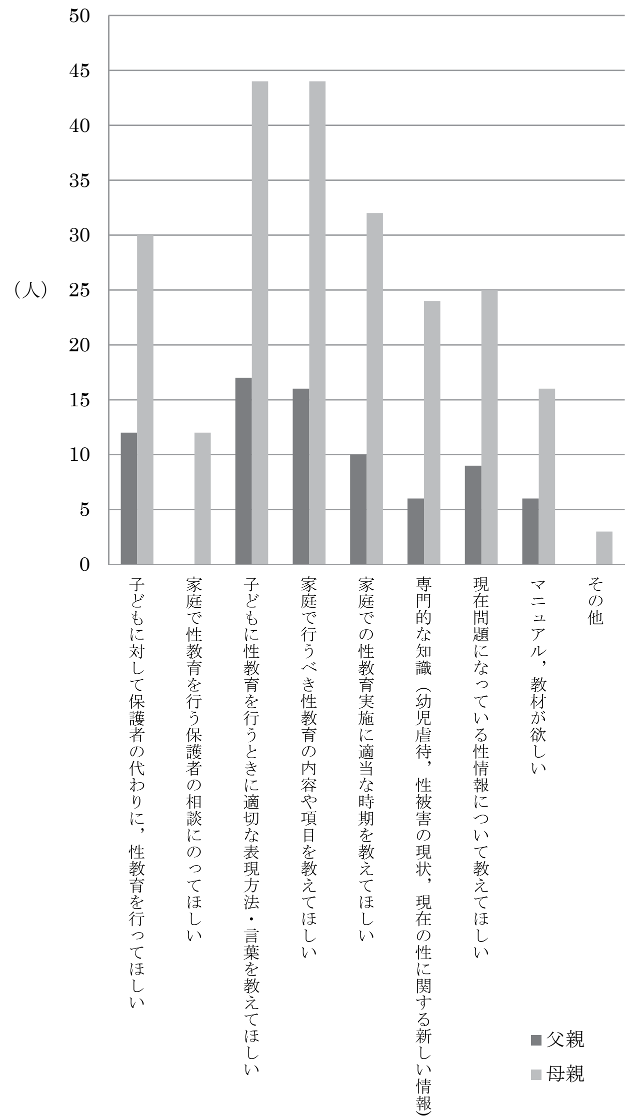

図２　専門職に支援を求める内容（複数回答）

表２　保護者の性別による差

	χ^2検定
家庭での性教育は必要	**
家庭で性教育を実施したことがある	*
家庭での性教育に戸惑いや困難さを感じる	*
家庭での性教育を行う際に専門職への支援を求める	**

*p<.01，**p<.05

表３　子どもの学年（低・中・高学年）による差

	χ^2検定
家庭での性教育は必要	
家庭で性教育を実施したことがある	
家庭での性教育に戸惑いや困難さを感じる	**
家庭での性教育を行う際に専門職への支援を求める	

**p<.05

Ⅳ．考察

家庭での性教育をほとんどの保護者が必要だと考えていることがわかった。しかし，実施については，３割程度と少なく，父親が１割，母親が４割程度と少ないことがわかった。特に父親は，必要と考えながら性教育の実施にいたっていないことがわかった。保護者の性別と「家庭での性教育が必要」と「家庭で性教育を実施したことがある」においても有意差が認められ（$p < .05$），父親は母親に比して家庭での性教育の必要性，実施ともに少ないことがわかった。竹俣，木村（2010）によると，子どもの性に関する主な相談相手は母親であることから，子どもから母親へのニーズが高いことが考えられる。また，小川，朝井（2006）による日本とドイツの性教育の比較検討では，日本では男児への性教育が女児に比べて少ないことが明らかになっている。本調査でも，同性である父親の性教育実施が少ないことから男児への性教育実施が少ないことが推測される。

そして，性教育を開始した方が良いと考える子どもの年齢は，第二次性徴の発現時期と重なっており，保護者が性教育は性成熟について教えることだと考えていることが影響していると思われる。また，適切な性教育開始時期に性差が生じた理由は，性成熟を教える時期として第二次性徴の性差を意識した結果ではないかと類推できた。

望ましいと考える性教育の実施者では，父母（両方の性）で教育することにより，自分の性について伝えやすく，子どもも両方の性を理解しやすいから父母両方で性教育を行うことが望ましいと考えていることがわかった。先に述べたように，男児への性教育は少なく，保護者が性教育を第二次性徴・月経教育が主な内容だと考え，女児に対する教育であると考えていることが想像される。加えて日本では，性教育を含めて子育ては母親の役割であるという文化的影響が強いことが考えられる。一方で，母親は男子の性教育に対する対処能力が女子に比べて低いことからも（岡崎，荻，2008；山崎，村上，山元，田中，2008）男児への性教育が少ないことが推察される。

性教育の項目では，第二次性徴の内容を反映していると考えられ，保護者は性教育を第二次性徴に対するものだと考えていると言えよう。実施した項目では，母親は性教育が必要だと考える項目と実施し

た項目に違いがあり，第二次性徴に関する特徴や仕組み等に関する知識の教授は実際には行われておらず，身体的変化への実践的対応が必要な項目について実施していた。第二次性徴に関する内容である月経教育は学校で行われており，実践部分への対応をしていることが考えられた。

家庭での性教育に戸惑いや困難さを感じる保護者は，６割以上と多くの保護者が家庭での性教育に対して戸惑いや困難さを感じていることがわかった。性に関する話題のなかでも性行為などはプライベートな内容であり，多感な実子に対してはより戸惑いや困難さを感じていることが考えられる。これまでの研究からも，小学生の保護者は氾濫する性情報への対応を迫られ戸惑いを感じ，日本の親は性教育の必要性を感じているが，対応の方法がわからず行えていないことがわかっている（竹俣，木村，2010；丹波，水谷，大橋，水谷，2005）。また，イギリスとオーストラリアでの研究でも，両親は自分の役割の側面についての不確実性や恥ずかしさを感じていると報告されている（walkar，Militon，2006）。家庭での性教育は，日本に限らず戸惑いや恥ずかしさから実施が困難な状態であることがわかった。

また，主な性教育の実施者である母親の７割が戸惑いや困難さを感じており，求める支援の内容に「相談にのって欲しい」を挙げていた。母親の戸惑いや困難さを感じる原因は，父親の性教育の実施が少ないことから男児の第２次性徴に関する性教育への自信の無さが影響していると推察できた。母親に対しては，子どもが自ら手にとって学ぶことができ，母親も参考にできるような教材の提示が必要である。具体的には，子どもたちから質問が多かった項目・内容をあらかじめ準備し，成長・発達にあわせて随時使用できる教材が必要だと考える。そして，父親と性教育を補完し合うことができれば，子どもだけでなく母親のニーズにも応えることができると推察される。

専門職に支援を求める割合は７割以上で，父母による比較では母親の方が有意に多かったが，父親も６割以上が支援を求めていた。そして，専門職に求める支援の内容は，適切な表現方法・言葉，内容・項目に関する知識の提供を求めており，必要性を感じていても性教育の実施に至らない理由ではないかと考えられた。すなわち，保護者は，子ども達にどのような性教育を行えば良いのかわからないし，専門職との交流を持って来なかった，あるいはそのような機会がなかったと言えよう。また，支援を求める専門職で多く選ばれていた保健師は，保健指導を中心に健康教育の活動を主にしていることから性教育に関しても支援を求められていると考えられた。一方，母親は，妊娠時から助産師と関わることが多く，産褥期には家族計画に関する指導を受けたりしていることから，助産師を性・生殖に関わる身近な存在として認識しているのではないかと考えられた。保護者，特に主な性教育の実施者である母親は，助産師に助言を求めていた。そこで，今後，助産師が所属する大学，保健所，病院などと連携して，性教育の講習会，電話相談の取り組みが必要とされると考える。

Ⅴ．結　論

小学生の保護者は家庭での性教育が必要だと考えているが，実施に至っておらず，父親は母親に比べて性教育に消極的であり，男児への性教育は少ないことがわかった。父母両方で性教育を行うことが望ましいと考えていることから，母親は父親の性教育への参加を期待していることが推察された。また，性教育を開始する年齢は，第二次性徴開始時期が適当であると考え，性行為に関する項目・内容に関しては特に戸惑いや困難さを感じている。小学生の保護者は，父母ともに専門職に支援を求め，家庭で行う性教育の内容・項目，表現方法を教えてほしいと考えていた。家庭での性教育実施を促す支援として，性教育の項目・内容，具体的な表現方法を示したマニュアル，保護者への教育的支援・相談に応じるなどのシステムが必要である。

謝　辞

本研究にご協力いただきましたＡ県のＢ小学校とＣ小学校の保護者の皆様，校長先生をはじめ諸先生方の本研究へのご理解に対して，深謝いたします。

付　記

本研究は修士学位論文の一部を加筆修正したものである。

文　献

三浦陽子，島田紀膺子（2010）．小学６年生の長子に対する母親の性教育に伴う思い―「母親の語り」の分析をとおして―．母性衛生，51（1），119-126.
中島伸子（2009）．科学的なものの考え方．無藤隆，岡本祐子，大坪治彦（編），よくわかる発達心理学（第２版）（pp. 100-101）．ミネルヴァ書房.
小川好美，朝井均（2006）．性教育における日独比較検討．大阪教育大学紀要．Ⅳ，教育科学，55（1），

1-20.
小倉由紀子，北川眞理子（2010）．家庭での性教育における親の果たすべき役割．日本助産学会誌，24（2），333-344.
岡崎愉加，荻あやこ（2008）．母親からみた家庭における性教育の実態．母性衛生，49（3），200.
竹俣由美子，木村留美子（2010）．思春期の子どもの性に関する研究第１報：性に関する親子の会話と性情報の入手について．金沢大学つるま保健学会誌，34（1），79-90.
丹波さゆり，水谷聖子，大橋裕子，水谷勇（2005）．中学生を持つ保護者の性知識と性教育に対する意識．中央大学生命健康科学研究所紀要，1，33-41.
Walker Joy & Milton Jan.（2006）．Teachers' and parents' roles in the sexuality education of primary school Children: a comparison of experiences in Leeks, UK and in Sydney, Australia. Sex Education, 6（4），415-428.
山崎奈津代，村上和代，山元公美子，田中満由美（2008）．中学３年生の子をもつ母親の性教育に関する意識調査．母性衛生，49（3），200.

Support for At-Home Sex Education by Parents Whose First Child is in Elementary School

― The Differences in Sex Education Awareness Between Mothers and Fathers ―

Tomomi KAMEISHI[*1], Chie SHITAMI[*2]

Abstract:

In this study, parents whose first child was in elementary school were surveyed regarding their views on at-home sex education and the support they desired from specialists. The results indicated that 84.6% of the parents considered at-home sex education as necessary; however, only 32.1% of them actually provided it. Only 14.9% of the fathers provided sex education; hence, it was surmised that while mothers provided more sex education, they also expected fathers to provide sex education. The age when parents thought it was advisable for children to start receiving sex education was linked to the period when their secondary sex characteristics appeared, and the parents faced difficulty and confusion in talking about content related to sexual behaviors. The parents indicated that the main support desired would involve being taught the content or items that should be covered in sex education and effective ways to discuss the topic. These results point toward the value of creating a sex education manual for parents and supporting them in delivering sex education to their children.

Keywords:

Sex（Sexuality）education, Elementary school student, Parents

＊1 Japanese Red Cross Hiroshima College of Nursing

＊2 Hiroshima International University